40

『看病手引歌』（文政10年刊）にみる仏教思想に基づく看護

平尾真智子[1)]，中村　節子[2)]

[1)]順天堂大学医史学研究室，[2)]看護史研究会

仏教思想に基づく看護書でわが国における江戸期以前のものは，鎌倉時代の良忠による『看病用心鈔』がほぼ唯一のものであるが，臨終時の看取りを主とした内容であった．今回新たに発見した『看病手引歌』は江戸時代後期文政年間に尾張の僧侶が発刊したもので，仏教思想に基づく看病の心得を平易に記した内容となっている．その内容と発刊の意義について明らかにする．

『看病手引歌』は内藤記念くすり博物館大同薬室文庫に所蔵されていたもので，『国書総目録』や『往来物解題辞典』にも未収録の文献である．形態は半紙を二つ折にして縦に綴じた「半紙本」で，大きさは縦19cm横13cm，表紙を除き全5丁10頁という小冊子である．作者は尾張萩白山沙門霊応となっている．尾張萩白山は現在の知多郡阿久比町大字萩字白山西のことで，霊応（1860年没）は当地の青龍庵（現法久院）の2代目住職である．出版は白山本地堂で文政十年（1827）の発行である．表紙の裏には八福田として一仏田，二聖人田，三和尚田，四闍梨田，五僧田，六父田，七母田，八病人田，が記されている．本文は1頁八行で，漢字かな混合文で振り仮名つき，七五調の文章である．

内容は『梵網経』の八福田のなかの看病第一福田の内容を示したもので，看病の功徳を説くものである．「たのむ心は看病の　人の情のふかきうえ　身をもおしまずつかえける　まことの人こそちからなれ　さすれば仏の梵網経に　勝れし徳をあらわして　八福田の其中に　看病第一福田と　誉つすすめて説玉ふ　しからば万事をさし置きて　病悩苦患の其人を　仏のごとくに思ひてそ　心を尽し看病の　深き功徳を得らるべし」とし，また仏の教えとして「勿体なくも世尊だに　病比丘あかし其時に　看病人のみへざれば　二便の不浄をとり玉ひ　床のけがれもきよめつつ　臥具しきのべてやすめまし　我を供養いたさんと　思ひし人のあるならば　病人をさそいいたわりて　看病供養いたせよと　くわしく説せ玉ふうへ　伊美敷養生せよがしと　いとねんごろに教ます　仏意の慈悲深き事　きくに心もおどろきぬ」と記している．病家について「まず病人のある家は　数分しつかにつくしみて　戸障子明立足の音　喧敷もわらひたり　無益の咄しの高声は　構て遠慮いたすべし　主親師匠の看病は　敬ひ篤くつかへよや　兄弟妻子の悩みには　情みふかくありぬべし　他人といへどもわが隣り　或は同行同伴や　かねて恩ある其人を　介抱するには皆共に　実技に心を用ゆべし」としている．看病の具体的内容として，飲食，衣服，臥具，医薬について記し，長病で痩身，骨いたみねだこなどができた場合には「用意いそぎて柔に　しとね三つをばしかしめつ　操かへ一ツを日に干て　床に塊なかるべし　寝がへりいたせし其時は　肌の下まで撫おろし　着類の皺を引のばし　兎角窮屈なきよふに　枕もかねて二ツ三ツ　用意いたして取替つ　心を添てやわらげよ」と述べている．終末期は「兎にも角にも看病は　仏を供養するよりも　功徳すするる事なれば　道俗共につとむべし　是皆菩薩の修行なり　臨終最後に至るまで　心をやすめ懇懃に　弥陀の誓願かたりつつ　唯善心を得せしめて　静に念仏すすめよや」と仏教による念仏と看取りを記している．

著者の霊応は文政9年に同じ体裁で『孝行手引歌』を著している．これはいわゆる寺子屋で教えられたテキストともいえる「往来物」の一種で，分類としては「教訓科」に入る．このことから『看病手引歌』の性格も同類の目的を持つと考えられる．内容は仏教思想に基づく看病の必要性と具体的な実技を示したもので，将来家人の看病を担う子供たちに向けてその心得を伝えたものと考えられる．尾張地方という限られた地域ではあるが，子供たちに向けた看病の啓蒙書が1820年代に存在していたことが明らかとなった．